

過去佛思想について

宮 坂 宥 勝

只今、御紹介にあずかりました宮坂宥勝でございます。本日はこちらの佛教学研究室の主催によります公開講演にお招き頂きまして皆様の前でお話できますことを大変光榮に存ずるものでございます。これから過去七佛の思想について少し私が調べましたところを皆様に申し上げてみたいと存ずるわけであります。過去七佛というのは御承知のようにな釈迦牟尼佛の前に、もうすでに六人の佛様がおつて、釈迦牟尼佛が第七佛であるというわけなんです。これを過去七佛というように呼んでいるわけです。

過去七佛の信仰というのは、インドの色々の資料を見ますと、例えば法顯がインドに旅行しまして帰ってきました、『高僧法顯伝』という旅行記がございますが、その中にも過去の三佛とか、あるいは過去の四佛を信仰しておったというようなことが記録されております。

それから二百年後に玄奘三蔵がインドにまいりましたときの旅行記であります『大唐西域記』を見ましても、やはりインドの各地方において過去の三佛であるとか、過去の四佛を信仰するというような記事が散見されるわけですね。そういう具合にしてインドの中世の時代においてもやはり過去佛信仰というものが盛んに行なわれていたというこ

とがわかるわけです。

しかしまた例えば過去佛、過去の七佛と申しましても、『法顕伝』のコーサラ国の条を見ますと、デーバダッタ（提婆）の教団においては常に過去の三佛を供養しておった、しかし釈迦牟尼佛のみは供養しないと、こういうような記事が見えておるわけです。「常に過去の三佛を供養してただ釈迦牟尼佛のみを供養せざるなり」と、こういうようにいつているわけです。御承知のようにデーバダッタは、釈尊の晩年でございますが、釈尊教団に対抗して一つの教団を組織した。そういうようなデーバダッタの教団が、法顕がインドに旅行した当時においてもまだ残存しておったのです。しかも過去佛を信仰していたということが、記録によってわかるわけであります。

それから今日西部タライ・ネパール地方のニグリハワーにアショーカーの石柱がございますけれども、それを見ますと過去の第五佛（七佛の内の五佛）、コーナーガマナの佛塔を増築したとあります。このアショーカーのニグリハワーの法勅文はちょっと問題がありますけれど、一般に読まれているところに従いますと、コーナーガマナの佛塔を二回修築したと、そういう記録が見えているわけですね。これによって見ましても、非常に古い時代から過去佛の信仰が常に行なわれておったということがわかるわけでございます。

それから皆様が御承知のように例えば『スッタニパータ』を見ますと、『スッタニパータ』の中には、カッサパ（Kassapa）で、迎葉佛の説き給うた言葉が記録されているわけです。これは勿論『スッタニパータ』の註釈において迎葉佛が説かれたものであると、こういうように云っておるわけですが、ともかく非常に古い時代においてもすでに過去佛信仰というものが行なわれていた。そしてインドの中世の時代を通じてずっとやはり過去佛信仰というものが実際に行なわれていたということが、わかるのでございます。

実際に残っているものを見ましても、パールフートの塔には過去佛を象徴した樹木などが見えておりますから、非常に古い時代、まあ少くとも西暦紀元前、三百年頃にはすでに過去佛の信仰はあったのである、ということがこうい

うものによっても知られるわけです。

どうして過去佛信仰というようなものが起こったのであるかという問題が一つあるわけでございます。それはもう少し話を向うに行つてから申し上げることにしまして、まず一般的にこの過去佛というようなものが一体どういふうな名前で伝えられているかということを経史的に見たのが、今ここに表にしたものです。過去七佛というのは御承知のように毘婆尸佛から尸棄佛、毘舍浮佛、それから拘留孫佛、拘那含牟尼佛、それから迦葉佛、釈迦牟尼佛。こういふ七人の佛陀が更に皆様御承知のように過去十五佛といふものに發展するわけですが、今、表に書いてきませんでしたが、マハーバスツ (Mahavastu) の中に過去十佛についてふれているところがあります。しかしこれは七佛の一つの發展形態としては説かれていません。けれども過去七佛といふものは過去十五佛の中に入つていきます。過去十五佛から更に發展していつた過去二十五佛といふものがあります。

原始佛敎の資料によつて見た場合に、過去七佛と関連してまず最初に気がつくのはサッタイシ (Sattaiśi) 七人の聖仙といふものがございます。これは御承知のように『リグ・ヴェーダ』以来、婆羅門敎のほうで七仙といふのが説かれておるわけでありまして、釈迦牟尼佛は第七仙、第七番目のイシ (īśi) であると、こゝういふように原始佛敎の經典の中に伝えられておるわけでありまして。ここにずうつと掲げましたのは、その七仙といふ言葉が見えている原始佛敎の文献を表にしたものであります。

例えば『テラ・ガータ』の二二四〇 (大正三三・三三二七) Samyutta-nikaya であるとか、『テラ・ガータ』の二二七六、また『スッタニパータ』の三五六偈などがあります。この釈迦牟尼佛といふ牟尼というのは第五佛 Koṅḍāmana こんだまな Koṅḍāmana-muni こんだまなむに と、こゝういふように呼んでおるわけでありまして。この牟尼 (muni) という言葉が非常に問題のあるものでありまして、現在の学界でもこれは一つの非常に大事な課題となつておるわけです。牟尼 (muni) の文化圏といふものを設定したりしてゐるわけです。この過去七佛といふものの名前が他に共通の一つ

の名前として、どういふものに出てくるかということに少し調べて見たわけですが、これは佛教の文献以外に古いところに出てくるわけでありませう。

まず毘婆尸佛でありますが、Vipasyin には一応の推定でありますが、Vipasyin, Vipassin と同じよういふ言葉の原形をさかのぼらせて考えると Vipassin ですね。Vipassin というのは Vipas と同じ言葉がございませう。Vipassin という形のはずでここに書きました『リグ・ヴェーダ』三の二六の九、九の八六の四四（ここに Vipascit というこのいふ形が出てまいります。佛教文献の中でも Divyavadana の中も Vipascin というこのいふ形が出てまいります。今ここに Vipas という言葉は Vipra と同じ語源の言葉で Ahirakas をむす。これは雲井先生にあとで確かしてもらわなはいと思ひますが、Vip という語根ですね。そうすると、やはりアンギラサス、アグニ (Agni) と関係がある言葉であることは明らかです。また、『リグ・ヴェーダ』の他に『アタルヴァ・ヴェーダ』も参考になります。

その次の尸棄佛ですが、Sikhin というのはこれも調べて見ますと、『アタルヴァ・ヴェーダ』の中にこの言葉が見えてゐるわけであります。これもやはりアグニをこのいふように呼んでゐるわけであります。漢訳を見ましてもいろんな訳がありますけれども、『アタルヴァ・ヴェーダ』の一九の二二の一五には、やはりアグニをこのいふように書いてあります。

それからその次のヴィシユンブー (Visvabhū) であります。ベッサブブー (Vessabhū) とパーリ語でいい、これは漢訳ではいろんな訳がございませう。例えば直訳する場合には一切有というような訳語があつたり、それからヴィシユバブッシュ (Viśva-bhuḥ) の vbhuḥ ですね。これを vbhu という意味にとりますと、やはりこれはサット sat (有)、存在するという意味、それから生ずるという意味もございませうから、一切生とか、種々変現とか、こういういろいろな訳語が与えられております。

Krakucchanda の語根を√kr といふようにみたもので、「成就」という意味に解釈されたのではないかと思えます。

もう一つ語源解釈としてこの Krakucchanda で大事なものは、Kakucchanda にもやはり火とか光というような意味の訳語を与える場合があるんです。それはつまり語源解釈の仕方が違うわけです。√krans とか、あるいは√krans とかこういうようなルートからつくられたものであると見ます。それを見ますと、これは佛教以外のバラモン聖典では、この Krakucchanda と同じこの言葉は私が今まで調べた範囲では出てまいりません。わずかに『マハーバータ』で Kakubha と同じように呼ばれているわけです。これは対応できるかどうかよくわかりませんが、参考までにあげてみたのでございます。

その次は第五佛の Kanaka-muni であります。これも Kanaka-muni というように呼ばれている言葉の見えるバラモン聖典はございませんが、Kanaka というのが『マハーバータ』に出てまいります。これもやはりシバの神を Kanaka と、こういうふうに呼んでおるわけです。もちろんこれもただちに対応できるかどうかわかりませんが、一応参考までにあげたわけでございます。パーリ語では Kanaka-muni は Konagamana-muni です。先ほど申しましたアショーカの石柱ですと、Konagamana とあって、パーリ語の g が k になっております。

その次の Kasyapa(迦葉佛)でもあります。これはやはり『マハーバータ』の中、Agni の神を Kasyapa といふが、これはまあごく一般的に Agni の神を Kasyapa といつたもので、原始佛教でもやはりそうですね。御承知のようにウルベーラの三迦葉 Kassapa が Agni(火)を祀っていた。それを積尊が説き伏せまして佛教教団に迦葉三兄弟が入信するという物語がありますように、そこでも非常に Agni と深い関係をもっておるわけでありまして。これも漢訳をみますと、護光というような訳語を用いる場合があります。この語根を調べてみると、√ka とか √kas とかいうように語根を見た訳語であります。それからもう一つ飲光、光を飲む、こういう訳語が与えられる場合がございます。これは語根を√pa とみたものです。あまりそういうことにふれますと話が細かくなりますのでそれくらいに

しまして、その次に釈迦牟尼佛でありますが、これは Angirasa と呼ばれています。Angirasa というのは御承知のように『アタルヴァ・ヴェーダ』の中に Agni を Angiras と呼んでいるわけですね。Angirasa というように釈尊のことを呼んでいるのは、原始佛教の經典では Samyutta-nikaya それから Digha-nikaya, Theragatha, Vinaya の二ヶ所、こういったような文献で Angirasa と、こういうように呼んでいるわけでありませう。

Digha-nikaya の中で 御承知と思いますが、アーターナータの護経というのがございます。『アーターナーティヤ・スッタタ』というのがありますが、その中で過去の七佛を讃嘆する偈が見えていられるわけでありませう。この『アーターナーティヤ・スッタタ』は御承知のように渡辺海旭先生が、原始曼荼羅のもっとも古い資料であり、これがもたまって後に『毘沙門天王経』になった、もしくは密教のほうの『孔雀経』に発展していったのであるというところをつきとめられた非常に大事なものであります。その『アーターナーティヤ・スッタタ』の中に Angirasa と釈尊を称している。アーターナーティヤの護経は非常に古い一つのマントラ (Mantra) の原形であります。ここに過去七佛が讃嘆されているわけでございます。

さてこの過去七佛の名称について佛教以外の他の婆羅門系の文献との関係を見たわけですね。過去七佛というものが、例えば婆羅門聖仙の方で、七人の聖仙 (Ṛṣi) というものが説かれているけれども、それと直ちに関係があるかどうかという問題になるわけですが、それは直接的には関係がないようですね。

七仙といいますが、文献によつてそのいわれられている順序が違ふのです。例えば『シヤタパタ・ブラーフマナ』や『プリハド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』に出ています。ゴターマというのは御承知のように釈迦牟尼佛の氏族の名前です。ゴターマ、バラドヴァージャ、ビシヴァーミトラ、ジャマダグニ。それからバシシユタ、そしてカーシヤパがでできます。それからアグニなどの七人の聖仙であります。これと非常に類似しているのが、『アタルヴァ・ヴェーダ』にあります。それから『マハーバーラタ』にも三ヶ所ほどにでております。またグジャラ

ト地方でもこういうような七人の聖仙を伝えている。佛教の文献のほうをみますと、これも原始佛教をやっておられる方は御承知だと思えますけれども、*Dīgha-nikāya* の中にこういう十人の聖仙が説かれています。これは *Anguttara-nikāya* にも二ヶ所ほど出てまいります。こういうぐあいにして、^註の十人というのは、インドの他の文献を見ますと、少し後代になります。Manusmṛiti (マヌ法典) の中でこういうように出てきます。しかし表にして見ますと、必ずしも合いません。中には合うものもありますが、その順序が違っている。しかし、非常になにかこう似かよったようなものもあるわけでありませぬ。

ここで一つ考えてみなくてはならないのは、こういう過去佛信仰というものが、どういうぐあいにして、これが形成されてきたかということでありませぬ。これは非常にむつかしい問題でございます。山田龍城先生の『大乘佛教成立論序説』という大著がございますが、その中で法に対する信仰から過去諸佛がつくり出されたように、また同じ信仰から将来佛が想定されたと考えてよいと、同書三三九頁に、そういうように先生がいわれておるわけでございます。この原始佛教の經典を見た場合に、すぐに気がつくことは、釈尊自身がこれは諸佛の説きたもうたものであるとか、もろもろの如来が説きたもうたものであるというようなことを云われているわけでございます。これをどういふように解釈するか、もしそれが真に釈尊が云われたことであるとしますと、つねに釈尊において過去佛がすでに想定されておったのではないかということが考えられるわけでございますが、それはともかくとしまして、山田先生はひきつづいて、こういうように云われているのです。

「かなり古くから存在した過去七佛も、佛説にある永遠の法 (dharma) を所依として *Kappa* (*Kalpa*) 説に扶けられて発生したものであると考えられる。」

この *dharma* (法) という、皆さん御承知のように、この佛教の理法は永遠不変のものであるというのは、すべての佛教徒にとっての信仰上の確信であったわけですね。

如来（釈迦牟尼佛）がこの世に出でたもうとも、あるいはこの世に未だ出でたまわなくとも、法というものは永遠に存在しているのであるという。これは原始佛教において確信をもって説かれておるものであります。従ってこれは現在、釈迦牟尼佛がこの世にあらわれて、そして始めてそこにおいて法が発明されたというものでなくして、法があくまでも先行しており、永遠のものであると、こういうような理念がそこに裏づけられて、すでに釈迦牟尼佛以前からして多くの佛が出でたもうて、そしてこの法を説かれておったのであると、こういうような信仰の必然性として考えられることであるわけでありませう。ところでどうして七という数に限定したのであるかというところ、こういう問題も非常にむづかしいものがあるわけでございます。インドの天文学の方からみますと、これは北斗七星がやはり七という数であって、それになぞらえたものであるとか、それからブラヴァツスキの『ゲハイム・レーレ』（秘密教）という書物がございます。これは神智学のバイブルと呼ばれていますが、一般にインドでは七という数は宇宙の完結性を象徴しているものである。ですから七というのは何もその数にとらわれずに永遠のくりかえしを、それによってあらわしておるのであると、こういうような解釈の仕方をしたりしておるわけでありませう。ただこれは一応、みなさんに一つの参考として、そういうようなことを申し上げたのでございます。

もう一つ、このまま参考になるかどうかわかりませんが、モヘンジョ・ダロの遺跡からジョン・マーシャルによって発見されました印章のいくつかに樹神信仰の場面があらわれています。そして、その中でその樹神の下の方に七人の聖者が並んでいるのがあるわけでありませう。

今日、その写しを持ってきたのですが、この印章は非常に小さなものです。右上方に樹がございます。この印章を発見しましたジョン・マーシャル、それからその他の学者がピッパラの樹であろうといっているのですが、この樹の根元のところに樹神が見えております。そしてこのやや下方に七人の聖者が並んでいる。こういう印章が樹神信仰の一番古い考古学的な遺品だろうといわれておりますけれども、これらの人物は西洋の学者が七人の聖者であるといっ

ています。こういうようなものはやはり非常に古い一つの資料として、それは直ちに過去七佛の信仰に結びついてく
るかどうかわかりませんが、おそらくそれに先行するものとして非常に大事な資料ではないかと思うわけであ
ります。

次に、Kanaka-muni 釈迦牟尼もそうですが、牟尼と呼ばれる。原始佛教の資料の中には牟尼が出てきます。それ
からマハームニ Maha-muni。釈迦牟尼もそうだが、こういうような呼び方で呼ばれているものをずっとひろい出し
たわけです。牟尼は近來の研究によると「考える人」ということだそうですが、それは明らかにヴェーダ文化とは異
質の文化圏に属している宗教者の一種である点に注意したいと思います。またパーリ語ではマヘーシ (Mahesi) すな
わち偉大なイシとよばれることもあります。釈尊をイシとよぶのは、やはりバラモンたちが、そうよんだものであり
ます。この Mahesi (Mahar-si) とか、Devosi (Devat-si) というような呼び方は必ずしもこれは佛教の文献に限ら
ずジャイナ教の方の文献でも、しばしば使われておるわけであります。従ってジャイナ教の文献をずっとここに表で
示したわけです (図表、略)。

それからその次に私達が實際の信仰として行なわれていたもので注意しなければならないのは、賢劫の四佛です。
四佛のなかに拘樓孫佛があります。拘樓孫佛につきましては、先程申しました『法鬘伝』の中のコーサラ国の条にあ
りますけれども、アシューカの石柱が建立されていた。それは『西域記』の中にも見えておりますが、勿論現在には存
在しておられないわけであります。それから次の拘那含佛はコーナーガマナでありますが、これも原始佛教の經典の中
で単独で説かれています。西部ネパールのニガリーリサーガルの石柱法勅、これは先年私も行って見ましたが大分鄙
な所で現在地にある石柱は位置を動かしてよそから持ってきたらしいのですけれども、『法鬘伝』にも見えておりま
すし、『西域記』にも見えております。

それから迦葉佛でありますけれども、迦葉佛についてもやはりアシューカが佛塔を建立したということが、これは

『西域記』に見えております。『法顕伝』の場合には迦葉佛の佛塔ということだけが見えていて、アシヨカが建立したということは、はっきり記録されておられません。これも勿論、現存しておらないわけでありませう。室羅伐悉底国にあったと、こういうように『西域記』ではいっております。それから釈迦牟尼佛については、これは『法顕伝』では記録されておりませんが、『西域記』の劫比羅伐窣堵国の条で、アシヨカが石柱を建立したとある。これは現在残っておりませんがアシヨカの石柱であるわけです。こういうぐあいにして釈尊が入滅されましたから、わずか一世紀経った時代にはほとんど全インドを平定したアシヨカによってなされた過去佛信仰が実際に遺物としても遺されておるわけでありませう。これは従来の佛敎史であまり重視されていませんが、『法顕伝』や『西域記』にインドのいたるところで過去佛信仰の遺跡やそうした信仰が伝えられているという記録があるのと合わせてみても看過しえないものがあります。それは実際に一般の人びとの間で行われていた信仰形態という点でも大切な意味をもっていると思ひます。

今度はそれを佛敎の文献の上でどういふぐあいに、この過去佛信仰が發展していったかというのを図にして御覧にいたします。時間の関係で、あまり詳しく述べられませんが、この図によって大体御覧になって頂くとわかると思ひますが、この過去佛の伝記は Mahapadana-suttanta や『長阿含経』の中の「大本経」、それから『増耆阿含経』の第四十四などに見えておるわけです。

こういう過去佛の伝記というものが単独の經典で実際に説かれるようになったのは、少し後では『七佛父母姓字経』というのがあり、曹魏の時代の訳であります。これが一つの単独經典として行なわれ、『佛説七佛経』というの、ずっと後の宋の時代に法天が訳しております。もう一つ、七佛の中の毘婆尸佛だけを取り扱った単独經典がありますが、それが『毘婆尸佛経』であります。これもやはり宋の法天が訳しております。

それからその次の七佛七道樹についてであります。これも只今申し上げました Mahapadana-suttanta の中に見

えておるわけでございます。

七人の佛をそれぞれ聖樹で象徴しておるものがあります。それが先程申しましたモヘンジョ・ダロの印章に見えていような、そういう一つの発想です。樹神信仰であろうと思いますが、そういう樹神信仰と結合して七佛七道樹が説かれているのに、のちの密教の經典ですが、唐の不空訳『佛母大孔雀明王經』というのがあります。孔雀經の翻訳は數種類ありますが、その中の一つです。それから参考にあげたのに義淨訳の『佛說大孔雀王經』というのがあります。原始佛典の *Āṅgīya-sūta* にある七佛婦依文は一つの呪文の形で發展していくわけでありませうけれども、この七佛婦依文というのが、やはり『摩登伽經』だとか『孔雀明王經』などに出てくるわけです。

『佛母大孔雀明王經』のこの形を發展させたのが『守護大千国土經』であります。これはやはり密教のものであります。宋の施護訳ですから、勿論、時代はずっと下るわけでありませう。それから次に七佛婦依文ですが、それが先程申しました *Āṅgīya-sūta* に見えているものであります。渡辺海旭先生は、七佛婦依文というのは *Āṅgīya* の發展形態である『毘沙門天王經』では消えてなくなっている、従って七佛信仰というのは後代になるといふ姿を消してしまっているということをおわけておるわけですが、そういうことはいえないわけであって、ずっと後までやはり続いているということでありませう。『大吉義神呪經』が北魏の時代に曇曜によって訳されておりますのがそれです。また、この *Āṅgīya-sūta* に見えている、こういう一つの原始的な形態をもって、そのまま一つの讚偈として説かれているものに『七佛讚頌伽陀』というのがあります。これは御承知のように現在サンスクリットの原文に還元したのが出版されております (*Bibliotheca Buddhica* XI)。

それから七佛婦依文の系譜を継承したものに『七佛八菩薩所說大陀羅尼經』や『灌頂經』などがあります。

ここで一つ、過去七佛の發展形態といたしまして、だんだんと形が変わってくるのでありますが、弥勒信仰が合流するわけでありませう。これはインド考古学上、今日知られていますように、大体グプタ王朝の初期の頃に弥勒菩薩の像

が作成されておりませけれども、過去七佛と弥勒菩薩を加えて八佛信仰になるわけです。それが文献の上で出てきますのは『増耆阿含経』や『大智度論』であるから、グプタ初期前後になります。それから孔雀経系統のものでは『佛母大孔雀経』『守護大千国土経』です。それから『七佛讚頌伽陀』でありますけれど、これは七佛といえますけれども、実は過去佛の次に最後に弥勒帰依文がみえております。そして漢訳ではその部分のみが訳されています（他はサンスクリット文の音写）。それで実際には八佛になっておるわけです。これは将来佛として弥勒佛を加えたのですから、この七佛は勿論過去佛としての七佛であります。このようにしてこれらの文献のおよその推定年代からしますと、インドに實際現在残っている一番古い弥勒菩薩の佛像の製作年代とだいたいあうようです。しかも弥勒が最初にあらわれたのは過去七佛の信仰と結合して出ておるといことが、これらの文献の上からも考古学的遺品の面からもいえるわけで、これは非常に面白い現象であると思います。しかも、ここでちょっと申し上げておきたいことは、こういう過去佛信仰が発展していくような場合に皆さん承知だと思えますが、だいたいにおいて、雑部密教という、つまり『大日経』とか『金剛頂経』のような正純な密教があらわれる以前の密教、つまり呪文とか呪術のようなものを中心にした密教の形態がございますが、こういう雑部經典の中に入ってきて一つの密教の流れの中で過去佛信仰というものが発展継承されていっております。そのもとをたどってみますという、やはり原始佛教の經典としましては、最も密教的な色彩の強い *Atanatiya-suttanta* の中で、すでに釈尊のことを *Angirasa* というような呼び方で呼んでおる過去七佛の讚嘆帰依の偈頌が見えておるわけでありますから、最初からすでにそういうような一つの密教的傾向をもっておったのであるということが考えられるわけであります。しかも *Atanatiya* の *Rakkha* (護経) というのは、これは除災の意味をもったものです。 *Atanata* の護経を唱えるのは災を除くためですから、のちに *Atanatiya-paritta* (アーターナータ呪) とビルマなどの南方佛教では呼んでいるくらいであります。

もしこういうような事実が一応認められるとしますと、従来、原始佛教というものは非常に知性主義の立場に立っ

たところのものであり、婆羅門の祭式主義に対して合理主義的、主知主義的なものだと一般にいわれているが、しかし一概にそういうようには断定しえないわけであって、もつと密教的な、あるいは呪術的な要素が原始佛教の中にも最初から含まれておったことが知られます。むしろ、そうした色彩をもった原始佛教の様相こそ当時の民衆と接触した、生きた佛教の姿であったと思う者であります。しかも、それがいつてみますと、さきほどから申し上げたように過去七佛のそれぞれの名前をみましても、佛教以外の婆羅門教典の中にすでに共通のものがいくつかみられます。しかもそういう起源が Rig-Veda 以来、非常に古いものがあるということでございます。これがやはり一つの背景になって、婆羅門教のほうで説きますところの七人の聖仙(Saptarishi)の觀念に過去七佛が結びつけられ、そして釈迦牟尼佛は第七番目の聖仙であるというようなことが原始佛教の古い經典の中で説かれています。これは今後一層傍証が必要でありますけれども、先ほど申しましたモヘンジョ・ダロの印章の中にみる一つの樹神の中において七人の聖者があり、しかもそこで樹の信仰と結びついていることからしまして、すでに「大本経」で七佛の信仰が聖樹信仰と結びついて説かれているのも、モヘンジョ・ダロ文明と何らかのつながりがあるのではないかと、少なくともそれはまったく無関係ではありえないのではないかと、こういうようなことが考えられるわけではあります。

今日は研究発表のようなつもりで、実は私、用意してまいったんですが、こういう公開の場で皆さんにお話を申し上げるといふことになりましたと、どうしてもやはり詳細な論証とか、あるいは資料の点でこまかく申し上げることが時間の関係で省略せざるをえないものですから、一応だいたい筋を追いまして、申し上げてみたわけでございます。ただ最後に一言申し上げたいことは、佛教のこういう信仰というもの、たとえば過去七佛というような信仰が突如として起こったものではないということ、しかもそれはある一つの時期にだけ行なわれておったものではなくして非常に長い歴史の中において積み重ねられ、しかもそれがずっと後まで発展し継承されてまいったということがいえるのであります。一つの宗教にしましても、あるいは一つの文化にしましても、そうですけれども、全体的な流れを追

って見ていかなくはならない。私たちの歴史というものは、現在、たとえば今日私たちがこうして生きておるこの時代というものも過去からの歴史とまったく断絶してここに現在が突然存在するわけではありません。必ず長い歴史の伝統というものが積み重ねられ、そして今日があるわけで、今日があるということは必ずこれから先、将来私たちの人類の歴史というものが継承され発展していくという意味があるわけであります。おそらくそういうような人間の本源の感情というものは非常に深い宗教感情として残されておったものであります。それが一つの佛教の信仰形態としては無限の過去から過去佛によって佛教が説かれてきたのであるし、それから今日ある佛教というものは、今日限りのものでなくして永劫の未来にわたってこれから顕われるところの未来佛である弥勒菩薩に継承されていくのであるという、永劫を貫ぬくところの宗教感情というものに裏づけられているのであります。そしてこの過去佛信仰というものが形成されたわけです。過去佛の信仰が古くからあって、そしてそれに弥勒信仰というものが結合したというのは、只今申し上げましたように歴史のある時期において形成されたのであります。過去佛の信仰であるからといって、この人間の本源の要求として自然にこうした信仰が形成されたのであります。過去佛の信仰であるからといって一千年も二千年も前のインドのできごとであるということではなくして、私達の今日の自分自身の存在というものを深く見つめていった場合に、非常に大事なことが教えられているのではないのでしょうか。とかく、だんだんと最近では世の中がせわしくなつてまいりますと、自分というものの世界だけしかわからない、あるいは自己というものだけをお互いに主張しあっているというようなことで、永遠というものにむかつて目をむけるという心の余裕がだんだんなくなつてきたように思います。過去佛と永劫の未来に出でたもう未来佛の信仰が完全に結合しておると、こういう佛教の教えを私達はもう一度やはり私達お互いの心の中に呼びさましてみたいと、こういうふうに思ひまして今日は大変粗筋の話をしました。この辺で終わらして頂きたいと思ひます。

（本稿は昭和四十四年十一月七日、大谷大学佛教学会における特別講演の筆録を先生に加筆していただいたものである。）